

大学生の職業選択状況の類型化とその予測因の検討

— 心理的要因と学修態度からの予測 —

A Typology and Predictors of University Students' Occupational Choice Status: Prediction from Psychological Factors and Attitude toward Study.

磯和 壮太郎 *ISOWA Soutarou*・今井田 貴裕¹ *IMAIDA Takahiro*・今井田 真実² *IMAIDA Mami*

(¹ 仁愛大学人間学部, ² 福井医療大学保健医療学部)

Keywords: 職業選択状況, 類型化, 潜在クラス分析, 多項ロジスティック回帰分析, 大学生

問 題

本研究では、大学生の職業選択状況の類型化を潜在クラス分析によって試みる。また、心理的要因と学修態度がその類型を予測する要因となるかを多項ロジスティック回帰分析によって検討する。これにより、学生一人ひとりの職業選択状況に応じた、より効果的な支援アプローチを検討するための基礎資料とすることを目的とする。

青年期後期に位置する大学生にとって、職業選択とそれに伴う就職活動は社会への移行を果たす上で極めて重要な発達課題であり¹⁾、希望進路の決定と就職活動はほとんどの大学生にとって避けることのできない課題である。この時期の進路決定は、単に職業を得るというだけでなく、自己のアイデンティティを確立し、社会における自らの役割を認識していくプロセスと深く関わっている²⁾。しかし、多くの学生が希望の進路を円滑に決定できるわけではなく、自らの職業を決められない、あるいは決めようとしないう職業未決定³⁾の状態に陥ることも珍しくない。

キャリア発達理論において、大学生の就職活動は、自己概念を現実世界で検証し、社会における自己の役割を獲得していく重要なプロセスと位置づけられる⁴⁾。この過程で生じる職業未決定は、単一の状態ではなく、多様な内実を持つことが指摘されている³⁾。下山³⁾は日本における大学生の職業未決定の状態を、未熟、混乱、猶予、模索、安直といった複数の次元から捉える職業未決定尺度を開発した。これは、単に希望進路が決まっていない状態だけでなく、積極的に情報を探し求める模索状態から、決定を回避し無気力な状態に陥るアパシーに近い状態まで、その質的な違いを考慮する必要性を示唆している。

一方で、すべての学生が同じプロセスや困難を経験するわけではない。学生がどのような状況に職業選択の過程で直面しているのか、その状況を多角的に捉え類型化し、それぞれの類型を予測する心理的要因を明らかにすることは、より個別化された効果的なキャリア支援策を講じる上で不可欠である。しかし、職業選択状況の類型化、およびその予測因を多面的に検討した研究は、いまだ十分とは言えない。

近年の類型化研究では、クラスター分析等の手法を用い、学生の職業選択状況をより具体的に分類する試みがなされている。例えば、不安感や職業アイデンティティ、自己効力感といった変数を基に、現実回避型、選択不安型、発達の未決定型、課題直面型などの類型が抽出されている^{5) 6)}。これらの研究は、学生がどの類型に属するかに応じた個別的支援が必要であることを示している。この職業選択状況の類型化にあたっては、職業選択不安を中心としつつ、職業アイデンティティや自己効力感といった学生個人の人々の能力を反映した要因を除いて構成し、これらの能力を反映した要因は職業選択状況の類型を予測する変数とすることが望ましいと考えられる。なぜならば、職業選択不安に対処するための能力に類する変数をクラスター形成に含めると、後に職業選択不安の低減要因としてそれらの予測力を検証する際に、独立変数と従属変数が重複することによって、統計的循環が生じ、因果方向や説明力を厳密に評価できなくなるからである。そこで本研究では、職業選択不安に加えて、能力的要素が弱いと考えられる希望する就職先イメージの明確さを類型化に使用する。これは、不安という情動的な負の側面と、就職目標の具体性という認知的な正の側面の2軸を用いることによって、職業決定プロセスの成熟度をより立体的に捉えられると考えられるためである。

また、職業選択状況の類型化に関する研究の多くは、分析上の課題としてクラスター分析を採用しているという問題点がある。探索的手法であるクラスター分析は、距離指標、連結方法、標準化の選択に研究者の裁量が入りやすく、入力順や抽出サンプルが変わるとクラスター構造が大きく変動するといった再現性の低さが指摘されている^{7) 8)}。こうした課題を補うモデルベースの手法が潜在クラス分析である。潜在クラス分析では、BIC・AICなどの情報量規準で客観的にクラス数を比較できることや、事後確率やエントロピーによって分類精度を定量化できること、Bolck - Croon - Hagenaars method や Revised Three-Step approach などの3-step 手法によって誤分類バイアスを小さく保ったままクラスの決定要因を推定できるといった利点がある^{9) 10)}。さらに、一旦推定したパラメータを他サンプルに適用すれば同一基準で類型化を再現でき、異なる大学や年度をまたいだ比較研究にも適用しやすい。したがって、職業選択状況の実践的示唆を他集団に一般化するには、方法論的にクラスター分析より潜在クラス分析を用いた類型化の方が適切である。しかし国内で潜在クラス分析を用いて大学生の職業選択状況を分類した研究は、管見の限り見られない。

また、学生の職業選択状況を類型化し、その支援策を検討するためには、どのような要因が職業選択状況の類型を予測するかに対する研究が必要である。進路選択の状況や職業未決定を予測する要因やその支援アプローチの検討のため、これまで様々な心理的要因が検討されてきた。例として、近年の研究では、就職活動が学生の精神的健康に与える影響が注目されており、活動に伴うストレス、不安、抑うつといったネガティブな側面が数多く報告されている^{11) 12)}。こうした状況は、就職活動中の学生に対するメンタルヘルス支

援の重要性を示唆している。また、職業未決定と最も強く関連するのが、アイデンティティの確立度であるとされ、特に、自己の価値観や目標が明確である対自的同一性が低いほど、職業決定に対する不安や先延ばし傾向が強まることが示されてきている¹²⁾。加えて、自己効力感については、自分は進路選択をうまくやれるという自信である進路選択自己効力感も重要な要因であり、アイデンティティと自己効力感がそれぞれ独立して職業未決定に影響を与えることが報告されている¹³⁾。このように、学生のキャリア支援を考える際には、進路決定や就職活動と関連して支援アプローチを取りやすい心理的要因について検討を深める必要がある。そのため、以上のような要因に加えて、本研究では新たに学修態度、Sense of Coherence (SOC)、人生の意味を予測要因として検討する。また、これまで主に検討されてきたアイデンティティの確立度¹²⁾ではなく、アイデンティティの発達過程に関わる要因を検討対象とする。

まず、学修態度を検討対象とする理由について述べる。これまでのキャリア研究では、学業成績と進路決定の直接的な関連は限定的とされてきた^{14) 15)}。そのため本研究では、学業成績ではなく、計画的な単位取得状況や欠席数、遅刻容認傾向、大学の授業への積極性を学修態度として検討する。先行研究では、主体的な学習は直接的あるいは社会的スキルを介して進路選択自己効力感を高めることが報告されている¹⁶⁾。そのため、キャリア支援においてはアウトカムである学業成績よりも、取り組み姿勢である学修態度の方が予測要因として機能的である可能性がある。

次に、SOCを検討対象とする理由はSOCはストレスフルな状況下でも健康を維持する力とされるためである¹⁷⁾。就職活動というストレスフルな状況において、SOCが精神的健康を保ち、建設的な進路選択行動を促す保護要因として機能する可能性がある。この点について検討した磯和・今井田²⁾では、SOCは直接的な保護要因として職業選択不安を低減することはないものの、後述する多次元アイデンティティが職業選択不安を低減する効果を正の方向で調整しており、間接的な保護要因であることを示している。

続いて、人生の意味を検討対象とする理由について述べる。人生の意味を構成する要素に着目すると、人生における意義の理解や目的意識、その一貫性の感覚は、自己の価値観に基づく主体的な進路選択を行う上で基盤となる心理的要因であると考えられる¹⁸⁾。そのため、人生の意味の感覚は困難な状況でも進路選択への動機づけを維持させる上で重要な役割を果たす可能性がある。実際、アイデンティティの確立プロセスが人生の意味の感覚を高めることが示されている¹⁹⁾。

最後に、多次元アイデンティティを検討対象とする理由は、これまでも職業選択状況や職業未決定を予測する変数とされてきたためである。しかし、従来のアイデンティティ研究が「確立か拡散か」という結果に注目しがちであり、先行研究ではその測定に多次元自我同一性尺度²⁰⁾が多く使用されてきた。これに対し、本研究では多次元アイデンティティを、Luyckx et al.¹⁹⁾によって開発された多次元アイデンティティ発達尺度 (Dimensions

of Identity Development Scale: DIDS) の概念を適用するため、その日本語版²¹⁾ を使用し測定する。DIDSは「コミットメントの形成」と「コミットメントとの同一化」という2つのサイクルからアイデンティティの発達過程そのものを捉えるものであり¹⁹⁾、この動的な視点は学生がどのように進路への関与を深め、あるいは見直していくのかというプロセスを詳細に捉えることを可能にすると考えられる。実際、職業未決定を構成する各種の不安に対して、DIDSの構成要素は異なる影響を与えること²⁾ が示されており、類型化の理解をより豊かなものにすると期待される。特に、満足のいく答えを見つけられずに悩み続ける反芻的探求の次元は、職業選択不安²²⁾ との関連で重要な示唆を与える可能性がある。

以上より、本研究では、大学生の職業選択状況について、職業選択に係る不安、および、希望の就職先イメージの明確さを変数とした潜在クラス分析によって探索的に類型化を試みる。そして、その類型を予測する要因として、従来検討されてきた精神的健康度とアイデンティティ、自己効力感に加え、学修態度やSOC、人生の意味を取り上げ、多項ロジスティック回帰分析によって職業選択状況の類型を予測するか否かを検討する。これにより、学生一人ひとりの職業選択状況に応じた、より効果的な支援アプローチを検討するための基礎資料とすることを目的とする。

方 法

本調査の実施手順と本研究の分析対象者

一般大学生267名の協力を得た。このうち、調査票に含まれていた3つのダミー項目(例、この質問は4を選んでください)すべてに正確に回答し、欠測値のなかった249名(男性147名、女性102名、 $M_{\text{age}} = 19.32$, $SD_{\text{age}} = 0.95$))を分析対象とした。分析対象となった者の学年の内訳は、1年生160名、2年生67名、3年生17名、4年生5名であった。

なお、磯和・今井田²⁾、今井田・磯和²³⁾、今井田他²⁴⁾、皿谷他²⁵⁾とデータの重複がある。

本調査の尺度構成

基礎的な属性を尋ねる項目と学修態度に関する項目 年齢、性別、希望の就職先イメージの明確さ、学修態度に関する項目を設け、測定した。希望の就職先イメージの明確さは、「あなたが将来就こうと思っている仕事のイメージがはっきりしていますか？」という項目を用いて項目得点を得た。項目得点が高いほど希望先の就職先イメージが明確であることを示す。「1. 全くはっきりしていない — 7. 完全にはっきりしている」の7件法で回答を求めた。また、学修態度は単位取得の計画性、授業の欠席状況、遅刻容認傾向、授業への積極的関与について尋ねる4項目について項目得点を得た。単位取得の計画性を「あなたは、単位を計画通り取得できていますか？」という1項目で尋ね、「1. 全くできていない — 7. 完全にできている」の7件法で測定した。授業の欠席状況を「あなたは毎期、一つの

授業につきどれくらい欠席しますか?」という1項目で尋ね、「0回 — 6回以上」の7件法で測定した。遅刻容認傾向を「あなたは咎められない授業であれば、どれくらい遅刻をしますか?」という1項目で尋ね、「1. 全く遅刻しない — 7. 遅刻をすることが多い」の7件法で測定した。授業への積極的関与を「あなたは、授業内の小テストや課題などについて、どの程度積極的に取り組みますか?」という1項目で尋ね、「1. 全く取り組まない — 7. 完全に積極的に取り組む」の7件法で測定した。それぞれの項目得点が高いほど各学修態度を備えていることを示す。

職業選択不安 職業選択不安尺度²²⁾を使用し、測定した。同尺度は大学生の就職活動前にも見られる職業選択における不安に着目し、職業決定前にも特徴的に見られる漠然とした不安を念頭に置いて開発されたものである。この尺度は、職業選択の前提となる要素についての自己理解に関する不安（自己理解不安）、職業への移行に関する不安（職業移行不安）、職業についての理解に関する不安（職業理解不安）、職業を決めていくことに関する不安（決定方略不安）の4つの因子から成る²²⁾。自己理解不安（項目例、自分が何をやりたいかわからないのが不安である）13項目、職業移行不安（項目例、社会人として自分がちゃんとやっていけるかどうか不安である）8項目、職業理解不安（項目例、いろいろな職業があることを十分に知らないのではないかと不安である）6項目、決定方略不安（項目例、いろいろ考えすぎてひとつの職業に決められないのが不安である）5項目を用いて、それぞれの尺度得点を得た。尺度得点が高いほど各不安が強いことを示す。原版どおり5件法（「1. あてはまらない」—「5. あてはまる」）で回答を求めた。

SOC Time-Perspective Sense of Coherence 9 (TP-SOC 9)²⁶⁾を使用し、測定した。同尺度は、University of Tokyo Health Sociology version of the SOC3 (SOC 3 - UTHS)²⁷⁾における把握可能感、処理可能感、有意味感の各1項目に対し、過去（これまでの私は～）・現在（現在の私は～）・未来（これからの私は～）を示す文言を追加し、各3項目に拡張したものである。これによって、Antonovsky¹⁷⁾が提唱したSOCの構成概念に近づけたうえで、少数項目で捉えることを試みている。把握可能感（項目例、これまでの私は、日常生じる困難や問題を理解できたり予測したりできた）、処理可能感（項目例、現在の私は、日常生じる困難や問題の解決策を見つけることができると思う）、有意味感（項目例、これからの私は、人生で生じる困難や問題のいくつかは、向き合い、取り組む価値があると思えると思う）のそれぞれ3項目を用いて、SOC（過去）、SOC（現在）、SOC（未来）の尺度得点を得た。尺度得点が高いほどSOCが強いことを示す。原版どおり5件法（「1. あてはまらない」—「5. あてはまる」）で回答を求めた。

人生の意味 人生の意味三次元尺度²⁸⁾の日本語版¹⁸⁾を使用し、測定した。人生の意味は、人生の本質的な価値観・生きがい（意義）、価値ある目標・目的・方向性の感覚（目的）、自分と世界、およびそれらの関係性の理解（一貫性）の3次元にまとめられるという見解が主流になりつつある^{29) 30)}という指摘から開発されたものである。意義（項目例、私の

人生は価値あるものである) 3 項目, 目的 (項目例, 私は自分の人生において, 1 つ以上の大きな目的を追求している) 4 項目, 一貫性 (項目例, 私の人生で起こるほとんどのことは, 理にかなっている) 4 項目を用いて, それぞれの尺度得点を得た。同尺度は, 高得点になるほど人生の意味について考えていることを示す。原版どおり 7 件法 (「1. まったくあてはまらない — 7. 非常によくあてはまる」) で回答を求めた。

自尊感情 Rosenberg 自尊感情尺度³¹⁾の日本語版³²⁾を使用し, 測定した。同尺度は自尊感情の強さを 1 次元で測定するものとして開発されており, 従来では 10 項目での合計得点を算出するが, 近年では正順項目で示された内容と逆転項目で示された内容が必ずしも同一の概念を測定していると言えないことが示されている³³⁾。そのため, 福留・森永³³⁾に倣い, 正順項目 (項目例, 私は自分に満足している。) で構成される肯定的自尊感情 (Positive Self-Esteem : PSE) の 5 項目と, 逆転項目 (項目例, 私は自分がだめな人間だと思う。) で構成される否定的自尊感情 (Negative Self-Esteem : NSE) の 5 項目を用いて, それぞれの尺度得点を得た。同尺度は, 高得点になるほど肯定的自尊感情または否定的自尊感情が強いことを示す。また, 中立の回答の重要性を考慮して今井田・磯和²³⁾の 5 件法 (「1. あてはまらない — 5. あてはまる」) で回答を求めた。

精神的不健康度 K 10³⁴⁾の日本語版³⁵⁾で得た。同尺度は, 精神的な健康度を 10 項目 (項目例, 理由もなく疲れ切ったように感じましたか?) で問うものである。10 項目すべてを用いて尺度得点を得た。尺度得点が高いほど精神的に不健康であることを示す。原版どおり 5 件法 (「0. 全くない」～「4. いつも」) で回答を求めた。

多次元アイデンティティ DIDS¹⁹⁾の日本語版²¹⁾を使用し, 測定した。同尺度は DIDS¹⁹⁾の日本語版であり, Erikson. E. H. によって提唱されたアイデンティティの感覚が, 個人によってどのような発達の様相を示すのかについて, コミットメント次元 (コミットメント形成, コミットメントとの同一化) と, アイデンティティの発達に必要なコミットメントに対応した探求次元 (広い探求, 深い探求), コミットメントに関与しない不適応的な探求を捉える次元 (反芻的探求) の計 5 つの次元によって, 多次元的に捉えることを目的としたものである^{19) 21)}。コミットメント形成 (項目例, 自分の人生をどうするのかについては, 自分で選んで決めた) 5 項目, コミットメントとの同一化 (項目例, 将来の計画のおかげで, 自分というものがはっきりしている) 5 項目, 広い探求 (項目例, 自分が進もうとする人生にはどのようなものがあるのか, すすんで考える) 5 項目, 深い探求 (項目例, 自分がすでに決めた人生の目的が本当に自分に合うのかどうか, 考える) 5 項目, 反芻的探求 (項目例, どんな人生を進みたいのか, どうしても考えてしまう) 5 項目を用いて, それぞれの尺度得点を得た。尺度得点が高いほど各要素が強いことを示す。原版どおり 5 件法 (「1. あてはまらない」—「5. あてはまる」) で回答を求めた。

なお, 質問票には上記以外の尺度・項目も含まれていたが, 本研究の検討課題ではないため, 記載を略する。

倫理的配慮

本研究は以下の倫理的配慮を順守して実施された。1) データは統計的に処理され、研究目的で利用されるため個人情報を守秘されること、2) 回答の拒否が自由であること、3) 心身の調子が悪い場合には回答を控えてもらうこと、4) 気分が悪くなった際は中止しても構わないことを、同意書に明記したうえで口頭でも説明し、書面での同意を得た。また、回答者同士の席を離し、隣席からのぞき込まれることを防止した。なお、調査の実施中に実際に気分が悪くなり中止した者はいなかった。

分析使用ソフトウェア

R version 4.4.0 を使用した。基礎統計量、相関係数の算出と相関分析には psych パッケージ (ver. 2.4.3) を、潜在クラス分析には mclust パッケージ (ver. 6.1.1) を多項ロジスティック回帰分析には nnet パッケージ (ver. 7.3.19) を使用した。

欠測値処理

統計解析にあたって、欠測値を含むデータはなかった。

結 果

基礎統計量と内的一貫性の確認

各変数の特徴を把握するために、基礎統計量と内的一貫性の確認を行なった。その結果を Table 1 に示した。結果として、天井効果または床効果が生じている項目は確認されなかった。また、各尺度の α 係数も α s = .75—.95 と良好であった。そのため、本調査で取得したデータは統計的に検討可能であると判断し、以後の分析へと進んだ。

相関分析

各変数間の関係性を把握するため、相関分析を行なった。その結果を Table 2, 3 に示した。まず、類型化に使用する希望の就職先イメージの明確さと職業選択不安との間の相関を確認した (Table 2)。その結果、職業選択不安 ($r_s = .53\text{---}.75, p < .001$) の内部相関、および、希望の就職先イメージの明確さと職業選択不安のすべての各下位尺度 ($r_s = -.22\text{---}-.46, p < .01$) との間に有意な負の相関が確認された。

次に、予測変数に使用する各尺度内の内部相関を確認した (Table 3)。その結果、SOC ($r_s = .82\text{---}.90, p < .001$)、人生の意味 ($r_s = .61\text{---}.70, p < .001$)、自尊感情 ($r = -.70, p < .001$)、反芻的探求を除く多次元アイデンティティ ($r_s = .58\text{---}.81, p < .001$) の全てにおいて、有意な正の内部相関が確認された。一方で、学修態度を測定する項目群については、授業の欠席状況が単位取得の計画性 ($r = .10, p = .12$) および遅刻容認傾向 ($r = .06, p = .32$) とは有意な相関を示さず、その他の項目間では有意な相関 ($r_s = .13\text{---}.35, p < .05$)

を示したものの、その相関係数から合成得点とせず、単項目として扱うこととした。

Table 1
各変数の基礎統計量

	平均値	標準偏差	範囲	歪度	尖度	α
年齢	19.32	0.95	18—23	0.99	1.13	—
性別	1.41	0.49	0—1	0.37	- 1.87	—
学年	1.47	0.71	1—4	1.52	1.88	—
希望職業イメージ	3.43	1.80	1—7	0.18	- 1.23	—
単位取得の計画性	5.34	1.68	0—6	- 0.81	- 0.37	—
授業の欠席状況	3.30	1.02	1—7	- 0.50	- 0.51	—
遅刻容認傾向	1.47	1.35	1—7	1.26	1.90	—
授業への積極的関与	2.47	1.78	1—7	1.08	0.00	—
職業選択不安	3.24	0.90	1—5	- 0.52	- 0.29	0.97
自己理解不安	3.21	1.02	1—5	- 0.51	- 0.57	0.95
職業移行不安	3.39	1.07	1—5	- 0.47	- 0.61	0.92
職業理解不安	3.47	1.03	1—5	- 0.56	- 0.42	0.92
決定方略不安	2.85	1.10	1—5	- 0.03	- 0.99	0.91
首尾一貫感覚	3.45	0.78	1—5	- 0.50	0.02	0.92
首尾一貫感覚（過去）	3.41	0.82	1—5	- 0.38	- 0.18	0.75
首尾一貫感覚（現在）	3.46	0.80	1—5	- 0.56	0.09	0.76
首尾一貫感覚（未来）	3.48	0.82	1—5	- 0.49	- 0.15	0.78
人生の意味	4.09	1.35	1—7	- 0.14	- 0.46	0.93
意義	4.56	1.55	1—7	- 0.42	- 0.58	0.87
目的	4.12	1.63	1—7	- 0.11	- 0.91	0.93
一貫性	3.72	1.41	1—7	0.20	- 0.43	0.87
肯定的自尊感情	3.39	0.93	1—5	- 0.49	- 0.41	0.86
否定的自尊感情	2.86	0.96	1—5	- 0.01	- 0.80	0.82
精神的不健康度	1.01	0.97	0—4	0.98	- 0.01	0.94
多次元アイデンティティ	3.10	0.70	1—5	- 0.30	- 0.05	0.92
コミットメント形成	2.99	1.01	1—5	0.02	- 0.88	0.88
コミットメントとの同一化	2.90	0.96	1—5	- 0.07	- 0.58	0.88
広い探求	3.32	0.93	1—5	- 0.52	- 0.04	0.88
深い探求	2.89	0.96	1—5	- 0.07	- 0.65	0.84
反芻的探求	3.38	0.90	1—5	- 0.48	0.07	0.83

Table 2
類型化に使用する変数間の相関係数

	年齢	性別	学年	希望の 就職先 イメージ の明確さ	自己理解 不安	職業移行 不安	職業理解 不安	決定方略 不安
年齢	—							
性別	.09	—						
学年	.78 ***	.10	—					
希望の就職先イメージの明確さ	.12	-.14 *	.16 *	—				
自己理解不安	-.15 *	.17 **	-.14 *	-.46 ***	—			
職業移行不安	-.02	.09	-.05	-.20 **	.60 ***	—		
職業理解不安	-.15 *	.10	-.14 *	-.29 ***	.75 ***	.68 ***	—	
決定方略不安	-.12	.05	-.12	-.22 **	.66 ***	.53 ***	.62 ***	—

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

Table 3
予測変数間の相関係数

	単位取得 の計画性	授業の 欠席状況	遅刻に 対する 意識	授業への 積極的 関与	Sense of Coherence					人生の意味					多次元アイデンティティ			
					過去	現在	未来	意義	目的	一貫性	肯定的 自尊感情	否定的 自尊感情	精神的 不健康度	コミット メント 形成	コミット メント との 同一化	広い探求	深い探求	反芻的 探求
単位取得の計画性	—																	
授業の欠席状況	.10	—																
遅刻容認傾向	-.35 ***	.06	—															
授業への積極的関与	-.20 **	.13 *	.31 ***	—														
Sense of Coherence(過去)	.25 ***	.01	-.05	-.16 *	—													
Sense of Coherence(現在)	.24 ***	.02	-.02	-.15 *	.88 ***	—												
Sense of Coherence(未来)	.25 ***	.06	-.03	-.15 *	.82 ***	.90 ***	—											
意義	.19 **	.06	.02	-.05	.47 ***	.46 ***	.43 ***	—										
目的	.14 *	-.02	-.06	-.08	.45 ***	.44 ***	.46 ***	.70 ***	—									
一貫性	.08	.10	-.03	.03	.42 ***	.43 ***	.42 ***	.61 ***	.67 ***	—								
肯定的自尊感情	.19 **	.08	.03	-.03	.52 ***	.54 ***	.52 ***	.76 ***	.58 ***	.54 ***	—							
否定的自尊感情	-.21 **	-.13 *	-.03	.00	-.29 ***	-.31 ***	-.29 ***	-.60 ***	-.40 ***	-.40 ***	-.70 ***	—						
精神的不健康度	-.18 **	-.04	.11	.11	-.15 *	-.16 *	-.12	-.43 ***	-.25 ***	-.24 ***	-.46 ***	.53 ***	—					
コミットメント形成	.20 **	-.04	-.11	-.08	.43 ***	.43 ***	.42 ***	.43 ***	.63 ***	.49 ***	.39 ***	-.29 ***	-.12	—				
コミットメントの同一化	.23 ***	.08	-.00	-.06	.45 ***	.43 ***	.41 ***	.50 ***	.62 ***	.53 ***	.45 ***	-.37 ***	-.18 **	.81 ***	—			
広い探求	.16 *	-.03	-.09	-.12	.45 ***	.44 ***	.44 ***	.41 ***	.57 ***	.44 ***	.38 ***	-.19 **	-.06	.58 ***	.62 ***	—		
深い探求	.22 ***	.01	-.04	-.12	.42 ***	.42 ***	.42 ***	.35 ***	.54 ***	.46 ***	.35 ***	-.20 **	-.03	.67 ***	.67 ***	.73 ***	—	
反芻的探求	-.05	-.12	-.04	-.09	.02	.02	.05	-.02	-.09	-.03	-.08	.25 ***	.17 **	-.19 **	-.14 *	.25 ***	.15 *	—

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

潜在クラス分析による職業選択状況の分類

職業選択状況を分類するため、希望職業イメージ、自己理解不安・職業移行不安・職業理解不安・決定方略不安を用いて潜在クラス分析を行なった。分析にあたっては標準化したデータを使用した。その結果をTable 4に、クラスに応じた標準化前の基礎統計量をTable 5に示した。6つのモデルを比較した結果、適合度（BIC = - 3024.94），事後確率の最小値（ $PP_{\min} = .038$ ）と中央値（ $PP_{\text{mdn}} = .98$ ），最少人数（ $N = 57$ ）から、3クラスが妥当と判断された。視覚的特徴を明確にするために、採択クラスの分類変数のローデータについて、理論的中央値を0，標準偏差を1として再度標準化した後，その平均値から各クラスのプロフィールを作成した。その結果をFigure 1に示した。Table 5に示した基礎統計量から，クラス1を明確・安心型，クラス2を不明確・全不安型，クラス3を不明確・脱方略不安型とした。クラス2，3，1の順に職業選択状況が相対的に良好であると考えられた。

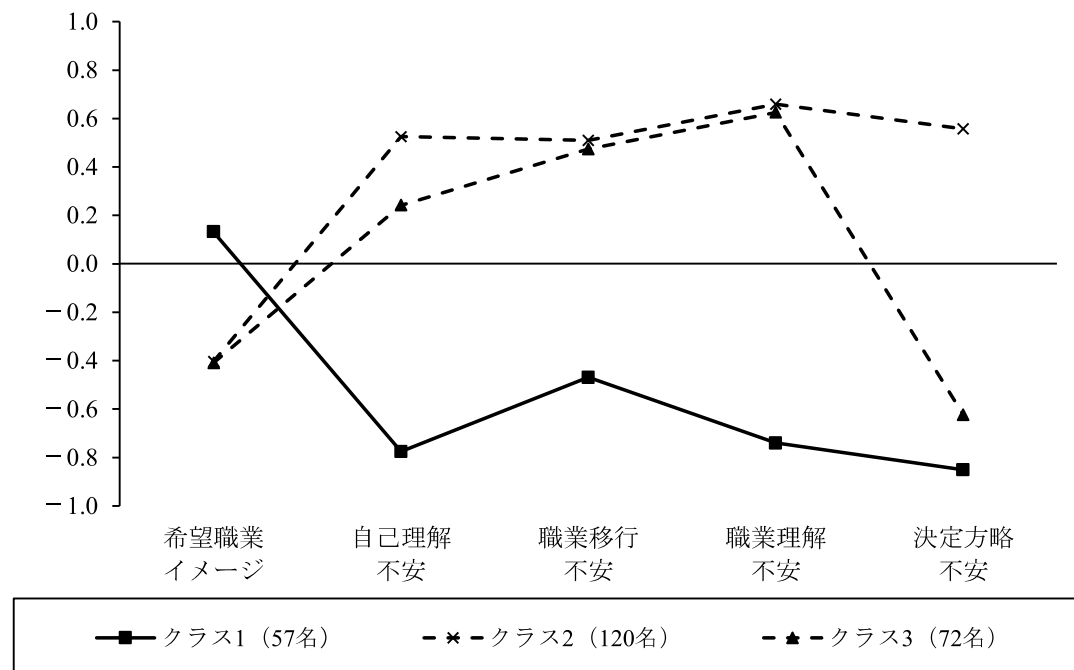
Table 4
潜在クラス分析のモデル比較

	適合度 BIC	事後確率		度数 ($N = 249$)					
		最小値	中央値	クラス 1	クラス 2	クラス 3	クラス 4	クラス 5	クラス 6
2クラスモデル	- 3049.67	.50	.98	130	119	—	—	—	—
3クラスモデル	- 3024.94	.38	.98	57	120	72	—	—	—
4クラスモデル	- 3042.28	.42	.95	51	89	76	33	—	—
5クラスモデル	- 3040.60	.49	.97	36	76	56	56	25	—
6クラスモデル	- 3056.94	.40	.88	36	77	27	41	34	34

Table 5
各クラスにおける分類変数の基礎統計量

	クラス 1		クラス 2		クラス 3	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
将来イメージ	4.26	1.85	3.19	1.74	3.18	1.68
自己理解不安	1.90	0.70	3.74	0.68	3.34	0.77
職業移行不安	2.34	0.95	3.72	0.84	3.67	0.99
職業理解不安	1.95	0.55	3.93	0.65	3.88	0.62
決定方略不安	1.80	0.66	3.79	0.59	2.12	0.62

Figure 1
大学生の就職選択状況の潜在クラスプロフィール



職業選択状況に対する多項ロジスティック回帰分析

年齢と性別、および、今回取得したその他の変数すべてを独立変数、潜在クラスを従属変数とした多項ロジスティック回帰分析を実施した。しかしながら、このモデルの独立変数の分散拡大係数 (Variance Inflation Factor : VIF) の最大値は 7.94 であり、多重共線性が発生し統計値が歪む懸念が示された。そのため、Step wise 法を用いた変数選択を行い候補モデルの構築を行なった後、採用された独立変数の VIF を確認しつつ変数選択を続けた。最終の独立変数として、授業の欠席状況、遅刻容認傾向、SOC (未来)、意義、精神的不健康、コミットメント形成、広い探求、深い探求、反芻的探究が採択された。このモデルにおける VIF の最大値は 2.78 であった。最終モデルの独立変数と、基準クラスをクラス 2 (不明確・全不安型)、対比クラスをクラス 3 (不明確・脱方略不安型) とした際の統計値、基準クラスをクラス 2 (不明確・全不安型)、対比クラスをクラス 1 (明確・安心型) とした際の統計値、および、基準クラスをクラス 3 (不明確・脱方略不安型)、対比クラスをクラス 1 (明確・安心型) とした際の統計値を Table 6 に示した。

基準クラスをクラス 2 (不明確・全不安型)、対比クラスをクラス 3 (不明確・脱方略不安型) とした場合、SOC (未来) ($B = 0.52$, $OR = 1.69$, $95\%CI[1.12, 2.53]$, $p = .012$) とコミットメント形成 ($B = 0.64$, $OR = 1.90$, $95\%CI[1.11, 3.25]$, $p = .019$) が正の予測因子として有意であった。一方で、意義 ($B = -0.68$, $OR = 0.51$, $95\%CI[0.33, 0.78]$, $p = .002$)、精神的不健康度 ($B = -0.44$, $OR = 0.65$, $95\%CI[0.44, 0.95]$, $p = .025$)、広い探求 ($B = -0.56$, $OR = 0.57$, $95\%CI[0.34, 0.96]$, $p = .019$) が負の予測因子として有意であった。

基準クラスをクラス2（不明確・全不安型），対比クラスをクラス1（明確・安心型）とした場合，コミットメント形成（ $B = 1.38$, $OR = 3.97$, $95\%CI[1.96, 8.06]$, $p < .001$ ）が正の予測因子として有意であった。一方で，精神的不健康度（ $B = -0.79$, $OR = 0.46$, $95\%CI[0.27, 0.76]$, $p = .003$ ）と反芻的探求（ $B = -1.09$, $OR = 0.34$, $95\%CI[0.20, 0.57]$, $p < .001$ ）が負の予測因子として有意であった。

基準クラスをクラス3（不明確・脱方略不安型），対比クラスをクラス1（明確・安心型）とした場合，遅刻容認傾向（ $B = 0.52$, $OR = 1.68$, $95\%CI[1.06, 2.67]$, $p = .029$ ）とコミットメント形成（ $B = 0.74$, $OR = 2.09$, $95\%CI[1.02, 4.26]$, $p = .043$ ）が正の予測因子として有意であった。一方で，反芻的探求（ $B = -1.28$, $OR = 0.28$, $95\%CI[0.16, 0.49]$, $p < .001$ ）が負の予測因子として有意であった。

Table 6
潜在クラスを従属変数とした多項ロジスティック回帰分析の結果

		B	SE	OR	95% CI	p-value
ク ラ ス 3	授業の欠席状況	- 0.25	.17	0.78	[0.56, 1.08]	.130
	遅刻容認傾向	- 0.30	.18	0.74	[0.52, 1.05]	.087
	Sense of Coherence（未来）	0.52	.21	1.69	[1.12, 2.53]	.012
	意義	- 0.68	.22	0.51	[0.33, 0.78]	.002
	精神的不健康度	- 0.44	.20	0.65	[0.44, 0.95]	.025
	コミットメント形成	0.64	.27	1.90	[1.11, 3.25]	.019
	広い探求	- 0.56	.26	0.57	[0.34, 0.96]	.033
	深い探求	- 0.50	.28	0.60	[0.35, 1.04]	.068
	反芻的探究	0.19	.21	1.21	[0.80, 1.84]	.368
ク ラ ス 1	授業の欠席状況	- 0.36	.20	0.70	[0.47, 1.03]	.069
	遅刻容認傾向	0.21	.21	1.24	[0.83, 1.86]	.304
	Sense of Coherence（未来）	0.33	.25	1.39	[0.86, 2.25]	.174
	意義	- 0.34	.27	0.71	[0.42, 1.22]	.215
	精神的不健康度	- 0.79	.26	0.46	[0.27, 0.76]	.003
	コミットメント形成	1.38	.36	3.97	[1.96, 8.06]	.000
	広い探求	- 0.00	.35	1.00	[0.50, 1.98]	.993
	深い探求	- 0.47	.36	0.63	[0.31, 1.27]	.196
	反芻的探究	- 1.09	.26	0.34	[0.20, 0.57]	.000
ク ラ ス 1	授業の欠席状況	- 0.11	.21	0.89	[0.60, 1.34]	.589
	遅刻容認傾向	0.52	.24	1.68	[1.06, 2.67]	.029
	Sense of Coherence（未来）	- 0.19	.26	0.83	[0.49, 1.39]	.472
	意義	0.34	.29	1.41	[0.80, 2.48]	.233
	精神的不健康度	- 0.35	.28	0.71	[0.41, 1.23]	.218
	コミットメント形成	0.74	.36	2.09	[1.02, 4.26]	.043
	広い探求	0.56	.36	1.75	[0.86, 3.53]	.120
	深い探求	0.04	.38	1.04	[0.49, 2.20]	.927
	反芻的探究	- 1.28	.29	0.28	[0.16, 0.49]	.000

考 察

本研究の目的は，大学生の職業選択状況について，職業選択に係る不安と希望の就職先イメージの明確さを変数とした潜在クラス分析によって探索的に類型化を試みることに，および，その類型を予測する要因として各種の心理的要因を取り上げ，多項ロジスティック回帰分析によって職業選択状況の類型を予測するか否かを検討することであった。これに

より、学生一人ひとりの職業選択状況に応じた、より効果的な支援アプローチを検討するための基礎資料とすることが目的であった。

各変数の基礎統計量と各尺度の内的一貫性、各変数間の相関関係の検討

まず、各変数の基礎統計量と各尺度の信頼性係数、各尺度の内部相関の値から、本研究における各変数には不備がなく、いずれも分析に使用可能であることが確認された。このことから、本研究の結果の信頼性は担保されていると考えられた。

次に、相関分析の結果から、希望の就職先イメージの明確さと職業選択不安の各下位因子との間に有意な負の相関が確認された。本研究では、進路決定プロセスの成熟度をより立体的に捉えられるとの認識から、不安という情動的な負の側面と、就職目標の具体性という認知的な正の側面の2軸を用いることとしたが、両者の間に有意な負の相関が確認されたことから、本研究で想定した職業選択過程における正負の2軸は斜交しており、単純なマトリクスとしての分類には不向きであると考えられた。一方で、職業選択状況には、希望の就職先イメージが明確になっていくことによって、職業選択不安が軽減されていくという過程を辿る可能性が示唆された。

職業選択状況の類型化と心理的要因からの類型の予測

職業選択状況を分類するため、希望する就職先イメージの明確さ、自己理解不安・職業移行不安・職業理解不安・決定方略不安を用いて潜在クラス分析を行ない、6つのモデルを比較した結果、3クラスモデルを採択した。この推定された3つのクラスは、職業選択状態が良好なクラスが1つ（明確・安心型）、不良なクラスが2つ（不明確・全不安型、不明確・脱方略不安型）であり、不良なクラスは職業を決めていくことへの不安である決定方略不安でのみ差が見られた。この結果を概観すると、クラス2、3、1の順に職業選択状況が相対的に良好と考えられ、職業選択におけるすべての事柄に不安を感じているクラス2と比して、クラス3は職業を決めていくことに関する不安のみが低かった。このことから、就職活動等の職業選択に対する取り組み方を認知している、あるいは職業選択自体を重くは考えていない学生が分類されている可能性が示唆された。

多項ロジスティック回帰分析の結果、クラス2（不明確・全不安型）を基準クラス、クラス3（不明確・脱方略不安型）を対比クラスとした場合、意義と精神的不健康度、広い探求の値が高いほどクラス2（不明確・全不安型）に分類されやすく、SOC（未来）とコミットメント形成の値が高いほどクラス3（不明確・脱方略不安型）に分類されやすかった。また、クラス2（不明確・全不安型）を基準クラス、クラス1（明確・安心型）を対比クラスとした場合、精神的不健康度と反芻的探求の値が高いほどクラス2（不明確・全不安型）に分類されやすく、コミットメント形成の値が高いほどクラス1（明確・安心型）に分類されやすかった。さらに、クラス3（不明確・脱方略不安型）を基準クラス、クラ

ス1（明確・安心型）を対比クラスとした場合、反芻的探求の値が高いほどクラス3（不明確・脱方略不安型）に分類されやすく、遅刻容認傾向とコミットメント形成の値が高いほどクラス1（明確・安心型）に分類されやすかった。

以上の結果から、職業選択状況を左右する鍵となる心理的要因はコミットメント形成であり、自分の人生の舵を握っているのは自分であるという意識が強いほど職業選択状況が良好である、あるいは、職業選択状況が良好であるほど自分の人生の舵を握っているのは自分であるという感覚が強くなる可能性がうかがわれた。一方で、職業選択状況が良好なクラス1（明確・安心型）と不良なクラス2, 3を分ける要因は反芻的探求であり、職業選択状況が良好であるとアイデンティティ発達にとって過剰あるいは停滞的なアイデンティティ探求をせず、ある程度アイデンティティが確立されてきていることがうかがわれた。

また、コミットメント形成以外にクラス2（不明確・全不安型）とクラス3（不明確・脱方略不安型）との違いを分ける要因は、意義、精神的不健康度、広い探求、SOC（未来）であることから、クラス2（不明確・全不安型）はクラス3（不明確・脱方略不安型）と比して、人生に対する本質的な価値観や生きがいを求め、それがゆえに広く人生の可能性を探求するも、未来に対する首尾一貫した感覚が弱いいため、その過程で生じる苦悩が精神的な健康を損なわせている、という状況がうかがわれた。一方で、コミットメント形成以外にクラス3（不明確・脱方略不安型）とクラス1（明確・安心型）との違いを分ける要因は遅刻容認傾向と反芻的探求のみであり、クラス1（明確・安心型）の方が咎められない授業であれば遅刻をする傾向にあること、またアイデンティティ発達にとって過剰あるいは停滞的なアイデンティティ探究をしていないことから、クラス1の方がより自己決定度とアイデンティティの確立度が高い可能性がうかがわれた。

以上のことから、クラス2（不明確・全不安型）がキャリア支援等を受けるなどとおして就職活動等の職業選択に対する取り組み方を認知することによって、クラス3（不明確・脱方略不安型）に移行し、そのなかで反芻的探求を脱しコミットメントを形成していくことでクラス1（明確・安心型）に至るという経路が想定された。

ただしその一方で、クラス2（不明確・全不安型）とクラス1（明確・安心型）を比した際には、クラス2（不明確・全不安型）とクラス3（不明確・脱方略不安型）を分ける要因であった意義と広い探求、SOC（未来）は、2つのクラスを分ける要因ではなかった。このことを踏まえると、クラス2（不明確・全不安型）がクラス3（不明確・脱方略不安型）を経てクラス1（明確・安心型）に至る、といった形で直線的に職業選択状況が成熟していくわけではなく、クラス2（不明確・全不安型）とクラス3（不明確・脱方略不安型）は質的に異なる集団であり、別の経路をたどってクラス1（明確・安心型）に至る可能性も否定できない。このように、職業選択状況の成熟のあり方については、縦断データを用いるといった形で更なる検討が必要である。

まとめと今後の課題

大学生において職業決定とそれに伴う就職活動は避けられない課題である。本研究の結果から、大学生の職業選択状況は3つのクラスに類型化され、それぞれのクラスの特徴が示された。この類型ごとにキャリア支援のあり方は異なってくると考えられた。

まず、最も職業選択状況が不良であると考えられるクラス2（不明確・全不安型）に分類される学生に対するキャリア支援については、メンタルヘルスを改善するための支援を行いつつ、学生自身の人生に対する価値観を整理する手助けを行うことが必要であり、同時に就職活動等の職業選択に対する取り組み方を指南することが有効であろう。

次にクラス3（不明確・脱方略不安型）であるが、このクラスはクラス2（不明確・全不安型）と比して職業を決めていくことに対する不安は低く、職業選択の方略についての不安は払拭しているものの、希望の就職先イメージはまだ明確ではなく、その他の職業選択不安（自己理解不安、職業移行不安、職業理解不安）は依然として高いクラスである。そのため、このクラスへのキャリア支援は自己分析や企業研究の方法、エントリーシート添削、OB・OGの訪問、インターンシップ等の支援といった、具体的な就活スキルの指南であると考えられた。その際には、未来に対するSOCが強いという特徴を活かすことも有効であろう。

最後に、クラス1（明確・安心型）に対する支援は、クラス3（不明確・脱方略不安型）よりも一歩進んだ形で就職活動を支援することであろう。このクラスは希望の就職先イメージが明確であり、各種の職業選択不安も低い。しかし本研究からは実践的な就職活動におけるスキルは明らかにできないことから、希望の就職先に進むことができるような具体的スキルの指南に注力することが有効であると考えられた。

本研究の限界として、対象となった大学生が1年生に偏っていたことが挙げられる。職業選択状況は学年が進行するにつれて変化していく。職業選択不安は学年が進むにつれてその切迫度が増していくと考えられ、自らが就職活動を行うという実感がまだ乏しい1年生と、そろそろ就職活動に向けて意識し始める2年生、就職活動が現実味を帯び、就職先の領域によっては就職活動が開始される3年生、就職活動の只中かあるいは活動を終えた4年生とでは、職業選択不安のあり様も希望の就職先イメージの明確さも異なるだろう。そのため、今後の課題として、各学年の調査協力者を均等に集めたうえで、本研究の類型が再現されるかを検討する必要がある。その際には、多様な学部や大学偏差値の学生が含まれる、大規模なサンプルを確保することが肝要である。

また、今回は横断データによる検討であったため、職業選択状況の遷移については検討できなかった。今後は縦断データを取得したうえで潜在遷移分析を実施することによって、職業選択状況の類型を遷移させる心理的要因を明らかにすること、クラスの遷移のあり方を類型化し、そのキャリア支援のあり方を検討することが求められよう。

希望進路の決定と就職活動はほとんどの大学生にとって避けることのできない課題であ

る。大学生が大学生活を実り多いものとし、将来の選択を支援していくことは大学の使命のひとつである。この分野における研究を今後より一層充実させ、学生一人ひとりの職業選択状況に応じた、より効果的な支援アプローチを検討するための基礎資料を蓄積していく必要がある。

引用文献

- 1) 山本 多喜司・シーモア・ワップナー, 人生移行の発達心理学, 北大路書房, 1992.
- 2) 磯和 壮太郎・今井田, 大学生の職業選択不安と多次元アイデンティティの関係の検討——首尾一貫感覚の調整効果を視野に入れて——, キャリアセンター紀要, (13), 2024, 15-33.
- 3) 下山 晴彦, 大学生の職業未決定の研究, 教育心理学研究, 34 (1), 1986, 20-30.
- 4) Super, D. E., A life-span, life-space approach to career development, *Journal of Vocational Behavior*, 16, 1980, 282-296.
- 5) 安藤 聡一郎, 日本の大学生の職業未決定類型化に関する一考察——アパシー心性及び余暇重視との関連から——, 青年心理学研究, 23 (2), 2011, 175-184.
- 6) Cohen, C. R., Chartrand, J. M., & Jowdy, D. P., Relationships between career indecision subtypes and ego identity development, *Journal of Counseling Psychology*, 42, 1995, 440-447.
- 7) van der Kloot, W. A., Spaans, A. M. J., & Heiser, W. J., Instability of Hierarchical Cluster Analysis Due to Input Order of the Data: The PermuCLUSTER Solution, *Psychological Methods*, 10 (4), 2005, 468-476.
- 8) Steinley, D., Stability analysis in K-means clustering, *British Journal of Mathematical and Statistical Psychology*, 61 (2), 2008, 255-273.
- 9) Lanza, S.T. & Rhoades, B. L., Latent Class Analysis: An Alternative Perspective on Subgroup Analysis in Prevention and Treatment, *Prevention Science*, 14 (2), 2013, 157-168.
- 10) Sinha P., Calfee C. S., & Delucchi, K. L., Practitioner's Guide to Latent Class Analysis: Methodological Considerations and Common Pitfalls, *Critical Care Medicine*, 49 (1), 2021, e63-e79.
- 11) 北見 由奈・茂木 俊彦・森 和代, 大学生の就職活動ストレスに関する研究——評価尺度の作成と精神的健康に及ぼす影響——, 学校メンタルヘルス, 12 (1), 2009, 43-50.
- 12) 森本 文子, 大学生における職業未決定とアイデンティティとの関連, 九州大学心理学研究, 9, 2008, 205-213.
- 13) 石井 美穂・平山 栄治・野村 和孝・前田 駿太・嶋田 洋徳, 大学生のアイデンティティ

- と自己効力感が職業未決定に及ぼす影響の検討, 早稲田大学臨床心理学研究, 15 (1), 2015, 45-52.
- 14) Rami, A. A. M., Zaini, S. N. M., & Aziz, M. F. A., Career decision making among Malaysian university students. *International Journal of Academic Research in Progressive Education and Development*, 10 (2), 2021, 703-714.
 - 15) Zaini, S. N. M., Md Rami, A. A., Mohamad Arsad, N., & Mohd Anuar, M. A., Relationship of academic performance and academic self-concept with career decision-making among UPM undergraduate students. *Asian Journal of University Education*, 17 (2), 2021, 50-64.
 - 16) 藤澤 広美・原口 恭彦, 大学生の進路選択自己効力感と学習との関連——社会的スキルの媒介効果に着目して——, キャリア教育研究, 37 (2), 2019, 23-34.
 - 17) Antonovsky, A. (1987). *Unraveling the mystery of health: How people manage stress and stay well*, Jossey-Bass Publishers, San Francisco. (山崎 喜比古・吉井 清子 (監訳), 健康の謎を解く——ストレス対処と健康保持のメカニズム——, 有信堂高文社, 2001)
 - 18) 浦田 悠・島井 哲志・マルテラ F・スティーガー M. F., 人生の意味三次元尺度 (3DM) 日本版の開発 (1) ——信頼性・妥当性の検討——, 日本パーソナリティ心理学会第 32 回大会発表論文集, 2023, 131.
 - 19) Luyckx, K., Schwartz, S. J., Goossens, L., Soenens, B., & Beyers, W, Developmental typologies of identity formation and adjustment in female emerging adults: A latent class growth analysis approach, *Journal of research on adolescence*, 18 (4), 2008, 595-619.
 - 20) 谷 冬彦, 青年期における同一性の感覚の構造——多次元自我同一性尺度 (MEIS) の作成——, 教育心理学研究, 49 (3), 2001, 265-273.
 - 21) 中間 玲子・杉村 和美・畑野 快・溝上 慎一・都筑 学, 多次元アイデンティティ発達尺度 (DIDS) によるアイデンティティ発達の検討と類型化の試み, 心理学研究, 85 (6), 2015, 549-559.
 - 22) 松田 侑子・永作 稔・新井 邦二郎, 職業選択不安尺度の作成, 筑波大学心理学研究, 36, 2008, 67-74.
 - 23) 今井田・磯和 壮太郎, 青年期における TP-SOC のサブタイプの探求——人生の意味, 自尊感情, 精神的健康度, 遅刻・欠席に着目して——, キャリアセンター紀要, (13), 2024, 35-45.
 - 24) 今井田・今井田 真実・磯和 壮太郎, 学生生活への積極的行動と消極的行動, 健康の指標の関連およびその性差の検討——休退学防止の視点から——, キャリアセンター紀要, (14), 2025, 31-40.

- 25) 皿谷 陽子・磯和 壮太郎・今井田, 大学生における正義観尺度の再現性と正義観と健康の指標の関連——TP-SOC や精神的健康度, 自尊感情に着目して——, 人間と環境, 22, 2025, 25-38.
- 26) 今井田・磯和 壮太郎, 簡易版学校教員の職務多忙感・負担感尺度と Time Perspective-Sense Of Coherence 9 の作成, キャリアセンター紀要, (12) , 2023, 13-24.
- 27) Togari, T., Yamazaki, Y., Nakayama, K., & Shimizu, J, Development of a short version of the sense of coherence scale for population survey, *Journal of Epidemiology & Community Health*, 61 (10) , 2007, 921-922.
- 28) Martela, F., & Steger, M. F., The role of significance relative to the other dimensions of meaning in life—an examination utilizing the three dimensional meaning in life scale (3DM) . *The journal of positive psychology*, 18 (4) , 2023, 606-626.
- 29) King, L. A., Hicks, J. A., Krull, J. L., & Del Gaiso, A. K., Positive affect and the experience of meaning in life. *Journal of personality and social psychology*, 90 (1) , 2006, 179.
- 30) Martela, F., & Steger, M. F., The three meanings of meaning in life: Distinguishing coherence, purpose, and significance. *The Journal of Positive Psychology*, 11 (5) , 2016, 531-545.
- 31) Rosenberg, M., *Society and the adolescent self-image*, Princeton, NJ: Princeton University Press, 1965.
- 32) 桜井 茂男, ローゼンバーグ自尊感情尺度日本語版の検討. 筑波大学発達臨床心理学研究, 12, 2000, 65-71.
- 33) 福留 広大・森永 康子, 自己評価的尺度における肯定的・否定的項目群因子の年齢別の分析——ローゼンバーグ自尊感情尺度と特性的自己効力感尺度——. 教育心理学研究, 66 (30) , 2018, 212-224
- 34) Kessler, R. C., Andrews, G., Colpe, L. J., Hiripi, E., Mroczek, D. K., Normand, S. L., Waletzky, E. E., & Zaslavsky, A. M., Short screening scales to monitor population prevalences and trends in non-specific psychological distress. *Psychological medicine*, 32 (6) , 2002, 959-976.
- 35) 古川 壽亮・大野 裕・宇田 英典,・中根 允文, 一般人口中の精神疾患の簡便なスクリーニングに関する研究. 平成 14 年度厚生労働科学研究費補助金(厚生労働科学特別研究事業) 心の健康問題と対策基盤の実態に関する研究 研究協力報告書, 2003.